早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

BPD 傾向者における見捨てられスキーマと BPD の徴候との関連

The Relationships between the Abandonment Schemas and Borderline Personality Characteristics in Individuals with Borderline Personality Features

2014 年 1 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

井合真海子

IGO,　Mamiko

研究指導教員：　根建金男教授

境界性パーソナリティ障害（borderline personality disorder: BPD）は、パーソナリティ障害の一つとして位置付けられる障害であり、感情の不安定性、空虚感、対人関係の不安定さ等が特徴として挙げられている(DSM-5，2013)。また、医療にかかるほど病理が重篤ではないものの、BPD の徴候をもつ BPD 傾向者においても、抑うつ状態の悪化や対人関係機能の悪化など、様々な機能不全を起こしやすいことが指摘されている(Trull et al., 1997)。本論文は、BPD 傾向者を対象として、認知行動理論の立場から、見捨てられることに関する認知的枠組み（見捨てられスキーマ）に注目して、見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響を明らかにし、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入の有効性を検討することを目的とした。

本論文は、9 章から構成されている。第 1 章では、BPD の病理の特徴や、BPD の理論の変遷、BPD に特徴的であるとされる見捨てられ不安の高さ、BPD 傾向者の特徴について、先行研究を概観した。第 2 章では、認知行動理論の立場から、BPD の病理の理解とアプローチ方法、見捨てられスキーマの重要性について、先行研究を概観した。第 3 章では、第 2 章で取り上げた見捨てられスキーマに関する研究の問題点を挙げた。具体的には、見捨てられスキーマを詳細に測定する信頼性・妥当性の高い尺度が必要であること、見捨てられスキーマが BPD の徴候に及ぼす影響に関するメカニズムを検討した研究が少ないこと、BPD 傾向者を対象として、見捨てられスキーマに焦点を当てて介入を行った研究は見受けられないことを指摘した。第 4 章では、第 3 章で指摘した問題点を踏まえて、本論文の目的と意義を論じた。具体的には、見捨てられスキーマを測定する尺度の開発、見捨てられスキーマの作用機序に関するメカニズムの検討、見捨てられスキーマの変容が BPD の徴候の改善に与える影響を検討する介入研究を行い、見捨てられスキーマの重要性について検証することを本論文の目的とした。

第 5 章では、見捨てられスキーマ尺度（the Abandonment Schema Questionnaire: ABSQ）を開発し、信頼性・妥当性を検討した。研究 1 では、内的整合性の高い 3 因子構造からなる尺度が開発され、十分な信頼性および併存的妥当性が確認された。また、見捨てられ不安を測定する尺度と BPD の全般的なスキーマ群を測定する尺度との弁別的妥当性を検討したところ、ABSQ は BPD 傾向者の見捨てられスキーマを測定することに特化した尺度であり、上述の 2 つの尺度との弁別は可能であることが確認された。

第 6 章では、ABSQ を用いて、見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響のメカニズムに関して、質問紙調査による検討を行った。研究 2 では、見捨てられスキーマが BPD の徴候である感情の不安定性や行動化に対してどのような影響を与えているかについて検討した。パス解析の結果、見捨てられスキーマが直接的に、あるいは感情の不安定性を介して、行動化に影響を及ぼしているという因果モデルが示された。研究 3 では、見捨てられスキーマが誘発している対処方略が BPD の徴候に及ぼす影響について検討した。パス解析の結果、見捨てられ場面において、見捨てられスキーマが「放棄・あきらめ」、「肯定的解釈の不足」といった認知的対処と「効果的なコミュニケーション

の不足」といった対人的対処を誘発して、それらの対処が BPD の徴候に影響を及ぼしているという因果モデルが示された。

第 7 章では、見捨てられ場面をイメージ想起する実験を行い、見捨てられ場面における見捨てられスキーマの賦活の程度と、認知（自動思考）・感情・行動について、BPD 傾向高群と BPD 傾向低群の反応の違いを比較した。その結果、BPD 傾向高群は BPD 傾向低群に比べて見捨てられスキーマが賦活しやすく、BPD の徴候に関連するような自動思考・感情・行動が誘発されやすいことが示された。また、見捨てられスキーマに関連する思考が、研究 3 で示されたような不適切な対処を誘発している可能性が示唆された。さらに、見捨てられ場面の相手の親密度の高低で、賦活しやすい見捨てられスキーマの因子が異なり、その後の自動思考・感情・行動が違うという結果が得られた。

第 8 章では、研究 1～4 の結果をふまえて、ABSQ を用いて、見捨てられスキーマの変容に焦点を当てた介入研究を行った。研究 5 では、見捨てられスキーマの内容特殊性に注目して、BPD 傾向者を対象として、見捨てられスキーマの内容を反証する認知的再構成の手続きの有用性について検討する 2 週間の短期的介入実験を行った。その結果、見捨てられスキーマが強固である BPD 傾向者においても、見捨てられスキーマの内容を反証する操作は可能であることが示された。一方、見捨てられスキーマの内容の反証の手続きのみを用いる短期的介入では、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容は難しく、BPD の徴候の改善までは至らないため、より長期的・多面的な介入が必要であることが示唆された。研究 6 では、研究 1～5 の結果をふまえて、研究 5 の見捨てられスキーマに対する反証手続きに加えて、研究 3 で得られた見捨てられスキーマが誘発する対処の変容を意図する手続きを行う 8 週間の長期的介入実験を行った。その結果、見捨てられスキーマに焦点を当てた群は、見捨てられスキーマに焦点を当てずに認知行動療法的な介入を行った群、および実験期間は何も介入を行わない Waiting List 群と比較して、ABSQ の得点および BPD の徴候のひとつである行動化の得点が有意に低減していた。よって、BPD 傾向者において、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容を促すことが、BPD の徴候の中でも特に行動化の改善につながることが示された。

最終章である第 9 章では、全ての研究に関する総括的考察を行った。本論文の研究 1～6 によって得られた成果、本論文の意義、本論文の限界と課題について考察した。本論文の研究 1 では、見捨てられスキーマを詳細に測定する信頼性・妥当性が高い尺度が開発された。これは、、BPD 傾向者を対象としたカウンセリング場面のアセスメントツールとして有用であると考えられる。本論文の研究 2～4 においては、見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響のメカニズムについて検討し、先行研究では示されなかった新たな知見が得られた。本論文の研究 5・6 では、BPD 傾向者を対象として、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入研究を行い、見捨てられスキーマに介入の焦点を当てることが、BPD の徴候の改善につながることが示唆された。